

朝、目を覚ますと、まどかが横で眠っていた。

天井を見上げてみる。間違いはない、見慣れた自宅の天井だ。

念のため、首だけ動かして周囲を見渡してみる。

机に椅子、壁際に並んだ棚。隙間から日の光が差し込んでくるカーテンも、全部私が選んだもの。

ベッドに手をつけて、身体を起こす。

一度小さく深呼吸して、それからゆっくり視線を斜め下に落とすと、やはりそこではまどかが、うつすらと胸元を上下させながら、なんとも言えない幸せそうな顔で眠っていた。

やれやれ、と軽く溜息をつく。

いつも、まどかがやってくるのは突然だった。

連絡手段を持っていないから当たり前と言えば当たり前なのだけれど、道を歩いていてふと視線をあげるとその先で手を振っていたり、店で買い物を済ませて出てくると嬉しそうに駆け寄ってきたり、こうして目が覚めると隣で寝ていた、なんてこともある。

「……まどか」

そっと、指先でまどかの前髪を梳きながら、私は小さく微笑んだ。

たしかにいつも唐突に姿を見せるまどかだったが、今日に限って言うのなら、それはほぼ予想通りと言って良かった

た。

さすがに朝いきなり、というのは若干想定外だったが、それだけまどかと一緒にいられる時間が長くなると思えば、なにも驚くことはない。

今日は、まどかの誕生日。

多分世の中のほとんどの人にとって、それは特別な意味を持つ日だろう。

もちろんまどかにとっても、そして私にとっても大切な日だ。

「まどか」

頬を軽く指でこする。

「ん……」

くすぐったそうに眉根を寄せるまどかの髪を撫でながら、私は耳元でもう一度名前を呼んだ。

「まどか、もう朝よ」

どうやらその声は夢の中のまどかにも届いてくれたようで、

「んん……あ……？」

目尻を何度もこすりながら、まどかはゆっくりと瞼を開いた。

「おはよう、まどか」

「えと、ほむら、ちゃん？」

まだ頭がぼうつとしているのか、こちらを不思議そうな

顔で見上げてくるまどかに微笑みかける。

「どうする？ もう少し寝てる？」

それならそれでもいいか、とも思う。せつかくの記念日ではあるけれど、まどかと二人、ベッドの中でまどろみに身を委ねるというのも、それはそれでできつと楽しいだろう。

「むー……うん、起きる」

まどかは一瞬迷ったような素振りを見せたが、すぐ眠気を振り払うように何度か首を振ると、よいしょ、とゆつくりと身を起こした。

「おはよう、ほむらちゃん」

「ええ、おはよう、まどか」

えへへ、と照れくさそうに柔らかな笑みを浮かべるまどかを、私は包み込むように抱きしめた。

「まどか、誕生日おめでとう……ん」

「ん……っ」

その小さな唇に、自分の唇をそつと重ねる。

軽い、触れるようなキス。

「ありがとう、ほむらちゃん」

頬を朱色に上気させながら、まどかは恥ずかしそうにうつむいてしまった。

その額にもう一度キスをして、ベッドから降りる。

「それで、今日はどこか行きたいところはある？」

カーテンを開け、日の光を室内に取り込む。

天気は快晴。まるでまどかを祝福するような青空は、出かけるのには絶好の日和だ。

「えっと、あのね」

まどかは逡巡するように一度言葉を区切り、それからゆつくりと顔を上げて言った。

「わたし、ほむらちゃんとお散歩したいな」

おずおず、とこちらの様子を伺うようなまどかの視線に、私はわずかに首を傾げる。

「散歩？」

「うん、お散歩」

あのね、とまどかは立ち上がって私の隣に並んだ。

「目的、とか特に決めないで、なんとなく行きたい方に行つて、面白そうなものがあつたら遊んで、美味しそうなものがあつたら食べて。ほむらちゃんと一緒に、ずっと手を繋いで」

まどかの指先が、私の手のひらに触れる。

そこに自分の指を絡めて、私はまどかの手を握りしめた。

「いいわね、行きましょうか。お散歩」

「うん！」

まるで夏の花のように明るく咲くまどかの嬉しそうな顔に、私もつい口元がほころんでしまう。

「それじゃ、着替えるからちょっと待っててくれる？」

「わかった、リビングに行ってるね」

「お茶とか、適当に飲んでてくれていいから」

ありがとう、と手を振りながら寝室を出て行くまどかに手を振って、私はクローゼットを開けた。

正直、そんなにたくさん服を持っているわけではない。同年代の他の娘たちに比べれば、はるかに少ない方だと思う。

そんな中から、一番気に入っている一着を取り出す。

シックな黒地をベースに、シルバーを散りばめたやや長めの丈のワンピース。

まどかが選んでくれたものだ。

「ほむらちゃん、かっこいい大人の女性のイメージだから」

自分では全くそんな気はしないのだけれど、まどかに言わせるとどうやらそういうことらしい。

寝間着を脱いでその服に袖を通し、髪を整えて鏡の前に立つ。

どうだろう。まどかの言う「かっこいい大人の女性」にちよつとは見えるだろうか。

いや、たとえ自分ではそう見えないとしても、まどかがそれを期待しているのなら、それに応えるのが私の役目だ。小さく握り拳を作って、心の中で改めて自分に言い聞かせてから、私は寝室の扉に手をかけた。

「ほむらちゃん、お着替え終わった？」

と、不意に向こう側からドアノブを引かれ、私は驚いてバランスを崩してしまう。

「きゃっ」

前のめりに倒れかける自分を、まどかが慌てて抱きとめてくれた。

「わ、ごめん、大丈夫？」

「だ、大丈夫……私こそ、ごめんなさい」

ああ。

せっかくなにかっこいい女性になりきろうとしていたのに、その最初からつまづいてしまった。

思わず落ち込みそうになる私の腕を、まどかがそっと手取る。

そのまま二の腕を絡めるようにして組むと、上目遣いを私を見上げて、まどかは嬉しそうに笑った。

「それじゃ、いこうか？」

そうだ、まだ一日は始まったばかりなのに、こんなところでしょげてどうする、私。

「ええ、いきましよう、まどか」

お姫様をエスコートする王子様になりきって、私はまどかを先導するように歩き出した。

今日がまどかにとって最高の一日になるように。

隣に並ぶまどかの笑顔が、ずっときらきら輝いているように。